

9.

〔典籍解題十七〕北陸道 久流加乃道北山またくるがのみち、又きたのみち、又やまのみち西宮と

も訓す、七州皆北海をうけたるを以て、東海東山に對し北陸道といふ。

〔簾中抄下諸國〕北陸道 七ヶ國 こしちといふ

〔類聚名物考 地理六〕越路 こしち

三越道みこしち

越前越中越後の三國を、むかしはひとつに越の國と言へり、古事記には高志と假名にも有り、京より往來の道をこし路と云、又はみこし路ともいへり、三越へ通ふ故に、三はみなりといふ事もあれども、三吉野三熊野の類ひ、みは眞といふに同じく、賞美の詞にて、眞玉眞金の類ひ是なり、但攝津近江の三津の類ひも賞美の詞も有、又三所津の名有は、かねていふも有は、必しもかぎりて云にはあらず、三熊野、三山、三越、三坂の類同じ。

〔日本書紀景行〕二十五年七月壬午遣武内宿禰令察北陸及東方諸國之地形、且百姓之消息也。

〔徳川禁令考 五十九道 路橋梁〕元文二巳年正月

北陸道往還道修復之儀ニ付御書付 御勘定奉行 江

御代官

大草太郎左衛門

去年高波ニ而崩候北陸道往還道如元修復不仕候而ハ難成候哉、所により繕ひ候而濟候場所も可有之候、入用ハ松平河内守より積出し候通ニ候、且又右往還道計ニ無之、外ニ道筋有之候得共、廻り道ニ而本道より里數いか程違候哉、左程之違も無之候は、只今迄之有來往還道ハ相止、外之道ニ仕、其所江只今迄之在家を引家造いたし候は、自今浪除之場ニも可然哉、左候は、右入用可相積候、ケ様之儀をとくと可致勘辨候只今迄之往還道是迄之通ニ兎角不仕候而ハ難成儀候哉、此度之通之高浪又有之間敷儀にも無之候間、右之外にも總體ケ様ニ仕候は、可然と存候